

森信三の全一学と実践 (3)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (3)

鳥取短期大学研究紀要 第64号 抜刷

2011年12月

森信三の全一学と実践 (3)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (3)

森は、思想的表現として「自証」と「化他」という階層を異にする 2 種の表現形態があるという。森の「自証」の学の出発点は『恩の形而上学』であり、それを土台に展開した『即物論的世界観』を中核とする哲学五部作、さらに学問の集大成である『創造の形而上学』を始めとする全一学五部作がある。また「化他」の代表作は『修身教授録』であり、その延長上に『幻の講話』がある。本稿では、森の学問的出発点であり、土台である『恩の形而上学』を「自覚」、「所照の自覚」をキーワードに考察する。

キーワード：森信三 恩の形而上学 自覚 所照の自覚 宇宙的生命

はじめに

森のいう「自証」とは、自己の存在を明らかにすることをいうが、この場合の自己とは大宇宙の中の自己、あるいは大宇宙と一体となった自己を指す。森の表現に従えば、「宇宙的生命の全一性と個々人が関わりをもつ体験を論理を介して明らかにした理論体系」をいう¹⁾。また「化他」とは他の人を教化することを意味する。恐れず意識すれば哲学の理論体系とその啓発といえよう。ただ森は哲学という学問の性格上一人ひとりがそれぞれの理論体系をもつべきだという。

前稿²⁾で紹介したように「自証」の理論を示した著作は 30 歳代の『哲学序説』、『恩の形而上学』、哲学五部作と呼ばれる 69 歳、70 歳に刊行した『即物論的世界観』、『宗教的世界』、『歴史の形而上学』、『人倫的世界』、『日本文化論』、そして集大成として 80 歳代で書き上げた全一学五部作の『創造の形而上学』、『全一的人間学』、『全一的教育学』、『全一の世界』、『情念の形而上学』がある。

また「化他」の著作は多々あるが、その中核は人生論であり、その代表作は 44 歳に著した『修身教

授録』とその延長上にある 76 歳時の著作『幻の講話』であろう。

本論では、「自証」の著作から『恩の形而上学』、『即物論的世界観』、そして『創造の形而上学』、また「化他」の著作から『修身教授録』をとりあげ、森の哲学 = 全一学の理論体系と実践について考察する。

「自証」の著作のうち上記 3 冊を選んだのは、森自身が述べるように『恩の形而上学』は森の理論の土台、原点をなす著作である。『即物論的世界観』は、敗戦を経験し、国の再生を強く願うと共に自身の学問のあり方を自省、社会科学的視点もつ必要性を感じ、マルクスの理論を媒介として理論を再構築した著述である。『創造の形而上学』は未来への方向性も示した全一学の中核となる著作である。また『修身教授録』は森の名を世間一般に広め、森の全国行脚講演の端緒ともなり、今尚多くの人々に読まれ続けられている啓発書である。

本稿では先ず森の学問的原点であり、出発点である『恩の形而上学』をみることにする。

1. 『恩の形而上学』

(1) 定義と特徴

『恩の形而上学』は森の全集の第一巻³⁾に収録されている。森は同書の序で次のように述べている。

「哲学はそれが全の学、實在の学として、これを知に即しては真知即全知の学である限り、我われ有限的存在としての人間にあっては、ついに自覚の体系的な自証展開」の外ない。「自覚はそれが自覚として自を離れない限り、如何に体系的であっても、これが自証展開は、必然、思想家自身の身証体認に基づくものとして、その把握並びに表現は、当該思想家の个性的色調を帯びるを免れない。」⁴⁾と先ず、哲学の定義を示すと共に一人一体系の必然性を示唆する。

続けて「著者は我われ有限存在における立命の境涯は、絶対者の絶対能照光に目覚める所照の自覚、並びにこれが現成としての行為との相即にあるとの立場にたつて、これが自証確認の為に、一応哲学上の主要問題に即して、これが体系的展開を試みた」、
「随ってこの書は、本来『所照の自覚体系』の一小素描とも名づけるべきものであるが、今これを名づけるに『恩の形而上学』の名称を以てしたのは、著者にあつては、如上の理論的自証の現実的の母胎の基調を為すものが、古来東洋に謂わゆる恩の自覚に存するが故である。かくして恩の自覚の最現実的帰結は、これを邦人としては、自己の所生即所照としての恩光の自覚に外ならぬゆえ、この書もまたこれを、東洋的自覚の立場にたつ一種の形而上学的努力といえるであろう⁵⁾と本書の特徴を明らかにしている。

東洋的な立場に立つ「自己の所生即所照としての恩光の自覚」とは、なにものかに生かされ生きる自己の自覚、万有の把握である。いわば親鸞的世界の形而上学的アプローチといえるであろうか。

序に次いで同書は以下のように構成されている。

序論

- 一 實在と自覚
- 二 所照の自覚
- 三 知行論
- 四 時空論
- 五 万有の秩序
- 六 悪の問題
- 七 實在と歴史
- 五 肇国即開關

ここではその全容を紹介、解説することは分に過ぎたることとして控え、その核心となるであろう「自覚」、「所照の自覚」の視点から、森哲学の一端に触れることとしたい。

(2) 自覚

森の「自証」に関する書物には、「自覚」という用語が頻繁に登場する。

森は、「自覚とは、すでに文字で示すように、自己が自己を知ること、即ち自己の如是現前の相を知ることをその中心とするが、しかも自己の現前如是の相を知るとは、同時にまた自己と自己を圍繞する万象との無限連関の実相を知るの謂いである。」続けて「そもそも自己というが、なるほど自己はその主観の無限超越性においては、一切の万象を超出して、万象限定の本源に会することができるが、同時に他の一面、人はその身体を介して外万物と交わる」、「同時にこの点より見れば、人は万象中の」「一極微存在であつて、まことに大海の一粟にも如かない。ゆえにこの立場からは、自己は外万象との無限連関裡に介在する一極微存在であり、随って自己の如是現前の相の体認は、必然に自己と万象との無限連関の如是相の認識を意味しなければならぬ。」⁶⁾という。

ここで自覚は知の働き、認識することと使われている。ただその方向が自己自身であり、自己を理解するためには心と身体を有した自己を圍繞する万象に及ばざるを得ないとする。

ただこの場合の自覚は「いのちの自証におけるい

わゆる客観的側面⁷⁾である。「では、自覚における主観的側面とは何か。即ち自己と共に、自己を中心とする万有の無限連関の如是相を照らすもの如何。これ自覚即ちいのちの自証において、最も根本的本質的問題⁸⁾である。「自覚とは、事物及び他人について知るところのいわゆる対知象ではなくて、即ち自己の如是現前の自相を知るの知でなければならぬ。されば自覚においては、能知・所知共に一応自己とするのである。随ってこの場合の能知とは、かの真の自己ならざる人及び物を知るところの対知知とは根本的に異なる所がなくてはならぬ。故にいま対象知を半円とすれば、自覚における能知は元来全円たることをその本来とする。」⁹⁾と自覚の真意を述べる。

(3) 所照の自覚

ここから森哲学の中心テーマである自己と万有の無限連関の如是相を背後から照らす「大全宇宙生命」¹⁰⁾、自己からいえば照らされているという所照の自覚論が展開される。

「わが如是現前の自相に目覚めるとは、即ち我われ人間の見聞覚知の背後にはたらく意念の根本反省によって始めて可能である。見聞覚知の背後、いつも顔出しこそしないが、常にこれを知る所の『主人公』が作用（はたら）いているわけであるが、問題は唯これに気づくか否かである。もとよりこれに気づかなくても、主人公が無いとは言えない。」¹¹⁾

「主人公の常在に気づくと否とは、見聞覚知そのものの趣を一遍せしめることを看過してはならぬ。即ち同じく花は花であっても、単にわが見聞覚知の対象として見るのと、本来わが心の主人公の絶対主人公の絶対常照裡の花と見るのでは、一面から天地懸隔するが故である。」¹²⁾

「個我に執する者は、有形的事物の認識さえ、対象たる個物とわが肉眼とのみでそれが可能であると考えやすいが、陽の光なくしては、肉眼もその作用をなすことができない。かくして我われが普通に見聞覚知とするものは、本来これを超えた本智常照裡

の事物を認識するの謂いであり、随って今この常在常照の光は、見聞覚知を秀過する共に、本来その対象たる一切万象の根底まで」徹底徹見するものでなければならぬ。¹³⁾

続けて「かくして自覚は本来所照の自覚でなければならぬ。そして所照の自覚とは、これを有形に即しては、即ち所生の自覚の謂いであり、これは具さには所生存在としての自覚であり、かくして自覚の最現実的焦点は、わがこの現身の所生の自覚として、孝の自覚に窮極すべきゆえんである。」¹⁴⁾

即ち我われは大宇宙生命の光を常に受けている。つまり大きな何ものかに生かされている。そして自己がそうであると同じように万象すべてが光を受け、生かされている。このことは自覚するか否かに関わらず肅然たる事実であるが、自覚することによって大きく捉え方が違ってくる。生かされ生きる命の自覚は、自ずと孝の自覚に帰結していく。

ではなぜ多くの者がこの所照の自覚を持ち得ないのか、換言すればどのようにしたら所照の自覚を持ち得るのか。森は「個我に執する」¹⁵⁾ところに問題があるという。さらに「われ等有限者における真実性の把握の途」は「かくして」「所照存在としての自己に目覚める所照の自覚の外なく、またこれを内容的には、自己の為我性の徹底自反に即してこれに触れる外ないであろう。」¹⁶⁾と自我脱却の自反の必要性を唱えつつ、人間に自覚の可能性を与えられたことに「まことに人間至上の恩恵としなければならぬ。けだし自覚によるでなければ、自ら自己の真を知るを能わず、同時に自らの真を自覚し得ないとは、即ちまた自己の生命の奥底に徹し得ないことを意味するがゆえである。」¹⁷⁾

また光を発する大宇宙生命の本源とその把握について次のように述べる。

「大宇宙は、これを有形に即して見るも、まことに広大無辺にして、久遠悠久その辺際を知り得ないが、いわんやその本来たる絶対無形の『生命』に至っては、ついに如何なる意味においてもこれが全的把握の途なく、真に絶対無底的存在という外ないであ

ろう。随ってかかる絶対無底性は、普通の意味では如何なる存在的言辞をもってするも、ついに限定するを許されるものではあり得ない。これ古来儒教では『無極』と言ひ、仏教では『無』または『空』等の言辞が与えられるゆえんである。¹⁸⁾と大宇宙生命は絶対無底的存在であり、有限存在の人間には全的把握の途はないとする。ただわずかに可能なのは「我われ自身のいのちの自証によって初めてその極微の消息の一端を伺いうる」¹⁹⁾ 続けて「大宇宙生命の自己限定としてみるも、これを如実には自らのいのちの自証によってその消息にふれるでなければ、畢竟じてついにその真は得難く、同時にまた大宇宙生命の真を得ない限り、仮に宇宙的秩序としてみるも、これは単に概念の形骸を弄するにすぎない²⁰⁾と自証によって大宇宙生命を自覚する意義を示す。

さらに森は所照の自覚を基本に、哲学上の様々な問題について論及するが、ここでは知行論、時空論、万有の秩序、悪の問題の要点を述べる。

(4) 知行論

「行為の行為たるゆえんは、飽くまでその内面の自覚にあり、随って自覚と行為とは、元来全的一体であって二物ではない。これを内より内観するとき自覚と言ひ、これを外よりその有形的実現に即いて見るとき、行為というのである」²¹⁾

ただ現実には知と行為の間には齟齬が生ずる場合が多々ある。それは「自覚内容を欠く」²²⁾からである。「知行一体の如実体認の中心は、行為の内面真相が一個の知であり、そして知の本来が自覚である限り、自覚そのものというべく、げに自覚こそは、知行一体の如実体認の中核核心」²³⁾である。しかも自覚の中心は「所照の自覚に即する己私の超克融会」²⁴⁾であると所照の自覚が知行一体に導くとする。

(5) 時空論

「時・空は、本（も）とこれ宇宙的生命の把握に即する、われら有限知の免れ難い分裂性より来るも

のであって、時空の窮極の根底は、畢竟唯一絶対的実在としての大宇宙の外ないわけである。ただこれを動的展開に即して把握するとき、そこに時間を得、これに反して静的展開の体系に即して把握するとき、そこに空間を得るのである。ゆえに時・空は、唯一宇宙的生命に対するわれら有限的存在の把握の両面というべきであらう。²⁵⁾と宇宙的生命の関連で時空を述べ、また「時・空はもともと相即不可離であって、我われの時間的体験のあらゆる瞬間における切断面は、実はそれぞれの空間でなければならぬ。即ち時間流は、その如何なる瞬間にも、全空間をその切断面として内包しつつあるわけである」²⁶⁾と時間と空間の不可分性を指摘する。

さらに時間には物理的時間の他に行動的時間があるという。「『行動的時間』とは、我われ人間が行動主体として働くさい、そこに意識せられる自覚せられる時間意識の謂いであって、それは物理的時間と同一」ではない。²⁷⁾

「一面には冷厳なる物理的時間を却下に踏まえつつ、しかもそこに自らの行動意欲をいかに企図し実現するかによって、我われ人間は、自らの行動的時間を体験すると共に、さらにそのような行動的企画の資料として、過去の事例を顧みるとすれば、そこにはすでに一種の歴史的時間の成立をみるといえるであろう」²⁸⁾と行動的時間さらに歴史的時間に言及し、その相違を「時間的自覚の長短並びにそれに伴うその客観性の程度如何に関わる」、「即ち行動的時間とは、直接行動の持続する時間を意味するに反して歴史的時間となると、たとえ個人主体の場合でも、そこに断続する行動を超えて、それを反省的に統一する主体的自覚において成立する時間意識」²⁹⁾だとする。

また時間の三様態、過去・現在・未来について「現在が時間意識の中心として、常に過去及び未来を統一し、過去が過去であり得るのも、それは現在によってであり、また未来がよく未来として成立し得るのも、それが現在のうちに現成する」ためだと、現在の中に過去が集約され、現在の中に未来の方向性が

あると述べる。続けて「現在は単に過現未の三様態中の一つとしての現在の外に、その底にはこれら時間の三様態を超越して、時間意識の成立する根底となる一面がある」、「即ち二種の現在がある」。しかしこの二種の現在は「別物ではない。」³⁰⁾とし、次のように説明する。「試みに未来と過去の間を介在すると考えられる現在を把握しようと力めて見よ。一瞬早ければ尚未だ未来であって現在ではなく、同様に一瞬遅ければ、最早過去であって現在ではない。かくして真の現在は、これを捉えようとすればするほど逃げるものであるが、しかも翻ってまた現在を離れては、過去も未来もなく、如何に悠久なる過去も、如何に遙遠なる未来といえども、畢竟これ現在裡の存在という外ない」、「かくして過現未を統一するものは、時間に対してまさに永遠というべき」であり、現在とは「永遠が相対的なる過・現・未という時間的系列の裡に、一瞬自己を映現する一閃光ともいうべき」³¹⁾と現在と永遠の関係について言及する。

(6) 万有の秩序

「万有は、それは唯一絶対者の絶対的自己限定による所生存在」³²⁾であり「いまこれを個物自身の立場からいえば、万有はすべてこれ相対相依の無限連関裡の存在の謂いである。即ち個物の出生が、絶対者の絶対的自己限定の成果であるとは、また一切万有の無限なる相互連関的な同時限定の謂いでなければならぬ。」³³⁾と存在する全てのものは絶対者によって創造されたものであり、個々の立場から言えば全てのものが相互連関しているという。この場合、万有の秩序は「非固定性、非凝固性」³⁴⁾であり、「無限なる動的展開に即していうのであり、しかもそれは、宇宙たる限り具有すべき調和として、まさに動的統一ともいうべきもの」³⁵⁾という。

そして万有の秩序の把握は結局「自覚を予想する。」³⁶⁾「万有はそれが万有たる限り、必然一つとして絶対者の所照存在たらぬはないが、しかもこれが体認は、自身が先ず自らの所照存在たることに目覚

めない限り実とはならぬ。即ち我われは、自ら所生存在即所照存在たることの自覚、即ち常所照の自覚を介して、初めて万有の所照存在たることを知り得るのである。」³⁷⁾と「欲念による有形物への執着」を離れ³⁸⁾、「所照の自覚」によって万有が体認できるとする。

(7) 悪の問題

森は「悪」についても論及する。³⁹⁾「思うに悪とは、我われ有限的存在として人間が、その自己中心の見解に基づく行為によって、実在の体系を部分的に歪曲攪乱するものと言うべきであろう。即ちこれを約しては、我見に基づく秩序の歪曲攪乱に外ならない。」⁴⁰⁾とする。また虚妄は「知的立場の色調が強い」のに対して、悪は「知的には虚妄の実現」、「逆に虚妄は悪の知的映像」。虚妄の「平面的なるのに対して、悪はその立体的実現」だと意識としての虚妄と行為としての悪の関係に触れる。⁴¹⁾

悪がなされるのは「何より先ずその行為主体が、意識的存在としての自由主体であり、即ちまた可能主体たる事が予想」される。これは悪が「人間に特有とされる所以」だとする。⁴²⁾

さらに「虚妄の根本中心は、自己の無知に対する無自覚に」⁴³⁾あるとして、虚妄そして悪からの救済のためには徹底した所照所生の自覚によるとした上で、その方法は宗教的には解脱教と救済教、仏教に即していえば自力教と他力教がその典型である。両教は「一見正逆の趣が存する」が「その現実の求道は、何れか自己に所縁の一道に専念」することによってのみ、それぞれ解脱或いは救済の境に与かり得るというべきであろう」⁴⁴⁾と禪と念仏の立場を説明する。

これに対して哲学は「一見相反するかに見える両者の間に、何らかの意味で会通点が見出されなければならぬ」、「しかも会通は、その会通性の故を以って、必然に理法に即して行なわれるのを常とする。」そしてそれは「自証の体系的展開に即して行なわれ

る外なく、同時にこの事はまた、悪の本質に対する考察上、さらに一段の徹底というべきであろう⁴⁵⁾と自覚、自証の通徹を強調する。

おわりに

以上のように『恩の形而上学』は自省反転、自我の超克により所照の自覚を得、また視点を変えれば常能照の下自覚を得、自証するとともに万有の存在、連関を体認するとし、この所照の自覚を前提に、知行論、時空論、悪の問題、本稿では触れなかったが開国、また神話等についても論及する。

さらに『恩の形而上学』では「実在の段階観」というべきものを展開するが、森は戦後マルクス主義の「全自然史」の立場を媒介として、一層客観的に「実在的生命の発現段階の考察」⁴⁶⁾を明確にした『即物論的世界観』を著す。さらに絶対的宇宙生命の能照能生は愛、創造論と展開されるが、この点を一層明確に示したのが森哲学の集大成全一学五部作、とりわけその中核となる『創造の形而上学』である。次稿では『恩の形而上学』を土台とし、実在と創造を展開した『即物論的世界観』と『創造の形而上学』を中心に考察することとしたい。

注

- 1) 森信三「即物論的世界観」『森信三全集第三巻』実践社、昭和40年10月、39-40ページ参照
- 2) 山田修平「森信三の全一学と実践(2)」『鳥取短期大学研究紀要』第63号、2011年6月、2-3ページ参照
- 3) 森信三「恩の形而上学」『森信三全集第一巻』実践社、昭和42年2月
- 4) 同上、259ページ
- 5) 同上、259ページ
- 6) 同上、291ページ
- 7) 寺田清一編『森信三先生 全一学ノート』実践人の家、昭和54年3月、27ページ参照
- 8) 同上、27ページ
- 9) 同上、27-28ページ
- 10) 森はこの背後にあり照らすものについて、人によって神、大自然、仏等さまざまな表現をするが、特にこだわりをもっていない。ただ森自身は「大宇宙生命」という表現が最も適しているとしている。
- 11) 前掲『森信三先生 全一学ノート』28ページ
- 12) 同上、28-29ページ
- 13) 同上、29ページ
- 14) 同上、30ページ
- 15) 前掲『恩の形而上学』297-298ページ参照
- 16) 同上、298ページ
- 17) 前掲『森信三先生 全一学ノート』30-31ページ
- 18) 同上、31ページ
- 19) 同上、31ページ
- 20) 同上、32ページ
- 21) 前掲『恩の形而上学』338ページ
- 22) 同上、339ページ参照
- 23) 同上、342-343ページ
- 24) 同上、343ページ
- 25) 前掲『森信三先生 全一学ノート』88ページ
- 26) 同上、89ページ
- 27) 同上、89-90ページ
- 28) 同上、90ページ
- 29) 同上、91ページ
- 30) 前掲『恩の形而上学』367ページ
- 31) 同上、367ページ
- 32) 同上、387ページ
- 33) 前掲『森信三先生 全一学ノート』54ページ
- 34) 前掲『恩の形而上学』390ページ
- 35) 同上、390ページ
- 36) 同上、390ページ
- 37) 同上、391ページ
- 38) 同上、390-391ページ参照
- 39) 同上、415-444ページ参照
前掲『森信三先生 全一学ノート』189-193ページ参照

40) 前掲『恩の形而上学』417 ページ

41) 同上, 427 ページ参照

42) 同上, 421 ページ

43) 同上, 428 ページ

44) 同上, 438-439 ページ参照

45) 同上, 439 ページ

46) 森信三「附篇解説」『森信三全集第一巻』実践社,
昭和42年12月, 548 ページ